飯盛城

いいもりじょう

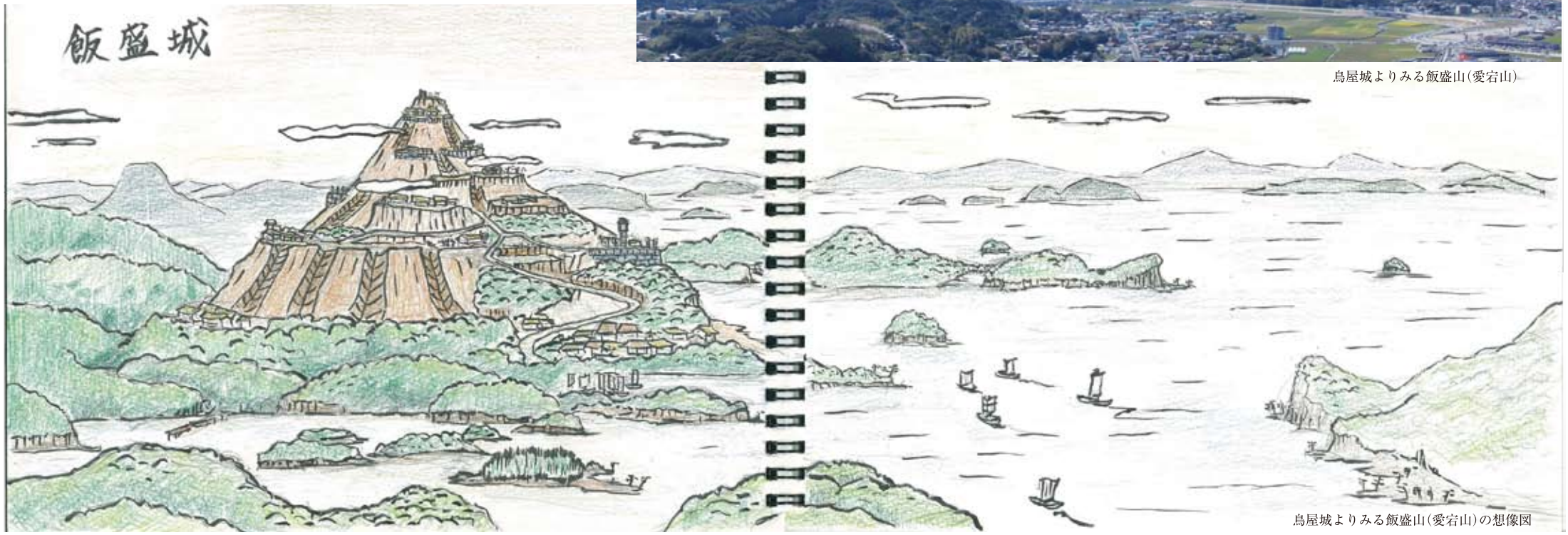
佐世保遺跡レポート

■所在地 /佐世保市相浦町(愛宕山)
■創建者 /松浦丹後守 親(まつうらたんごのかみちかし)
■年　代 /天文4年(1535年)
　　～元和元年(1615年)
■形　式 /山城・館城
■遺　構 /曲輪・石墨・竪堀・井戸

大智庵城を落とされ、一度は滅びたかに思われた宗家相浦氏は16代当主親(ちかし)の飯盛城建立により、相浦の地にて復活を遂げました。
そののち平戸方の再三に渡る攻撃にも城主の松浦丹後守親と家臣の奮闘により屈することなく宗家相浦の全盛期を迎えました。しかし1563年より始まった戦で長期に渡る兵糧攻めと支城の落城により、平戸方に包囲され飯盛城は孤立してしまいます。やむなく城主の松浦丹後守親は平戸の隆信(たかのぶ)の次男九郎親(くろうちかし)を17代当主として養子に迎え、事実上の降伏をします。その後、17代九郎親からその子の18代定(さだむ)へと引き継がれ、最後は一国一城令によって取り壊されたと考えられています。

半坂峠よりみる飯盛山(愛宕山)

鳥屋城よりみる飯盛山(愛宕山)



鳥屋城よりみる飯盛山(愛宕山)の想像図

＜飯盛城に関する文献＞

1 長崎新聞掲載記事 発行日：2011年12月8日

愛宕山の山頂付近で確認された石垣跡＝佐世保市

〝幻の飯盛城跡〟か

愛宕山頂に石垣群

郷土史家が確認

詳しい所在地が不明なため地元郷土史家の間で「幻の城」とされる佐世保市相浦の戦国時代の城、飯盛城について、同市日野町の郷土史家、澤正明さん(73)がこのほど、愛宕山（別名飯盛山、259㍍）の山頂付近に古い石垣跡があることを確認した。澤さんは同城の遺構ではないかとみており、「多くの研究者に見てもらい解明につながれば」と話している。

澤　正明さん

市教委などによると飯盛城は戦国期、相浦一帯を領した「宗家松浦氏」の16代目、松浦親が1535（天文4）年築造。同城を本拠に対立関係にあった「平戸松浦氏」の攻勢に抵抗したが、66（永禄9）年に平戸から養子を受け入れて和睦。江戸期に廃城になったとされる。

城（本丸）の所在地については古文書の記述などから、南麓の木宮神社が有力視されるが、東西の麓付近とみる説もある。一方、山頂には戦乱後に地蔵菩薩（ぼさつ）が祭られたが、城跡との説はなかった。

澤さんは佐世保史談会や佐世保松浦党研究会に所属。同研究会などが進めている中世山城の調査に伴い、以前から存在を知っていたという石垣をあらためて精査。11月中旬までに城跡との見解を固めた。

石垣は頂上から山中に分け入った場所にあり、現存するものは最大で高さ約2㍍。ほかに、石垣が取り壊されたかのように石塊が散乱した場所もある。

澤さんは同城が難攻不落を誇ったとされることから「山頂付近でなければ平戸の猛攻は防げなかったのではないか」とみる。市教委社会教育課は「山頂付近の石垣はこれまで確認していない。今後、調査を検討したい」としている。

（山口恭祐）

2 新佐世保昔話 発行日：2011年4月1日　著者：久村貞男

■飯盛城

城跡に想定される場所は、飯盛神社が鎮座する飯盛山から南に下る丘陵の先端部である。神社やその西側の浄水場などで地形の改変が著しい。飯盛城の築城にあたり、小野にあった小社を移転して置いたのが飯盛大権現である。それが鬼門の位置にあると見立てると、逆の南西方向に現在城跡と想定される飯盛神社があることになる。

飯盛城はどこにあるのか

印山記によれば、「此飯盛城と申は、高事雲に聳、後は古木蔭を累、東は大河、西は蒼海満々として、其外堀を掘り水を湛え、香椎川・西方寺口迄要害きびしく固ければ容易責べき手段もなし」とある。

高事雲に聳とは飯盛山をさし、後は古木蔭を累は、飯盛山の北側の山林は大木が重なっている様をいう。東は大河とはいささか誇張ぎみだが相浦川、西は蒼海は、相浦港から西の海を外堀に見たてている。香椎川・西方寺口は残る南側にあたり、相浦港から金照寺方向に上る香椎川の谷は天然の要害であり、攻める手段はないと表現している。

飯盛山　手前建物の裏が飯盛城想定地

この記述の位置関係からも、現在の想定地を表現していることに間違いない。また、飯盛山も城の一部であると見ている。要するに印山記では堅城のよう表現しているが、戦国時代において強攻めに合えば、島原の乱の原城のように落城は時間の問題であったのだが、本文で記述したように平戸方は囲んで、自ら和睦に出るような作戦をとったのだろう。

この城には、16代宗金親、17代九郎親、18代定、19代正が居城とした。最後の正は元和9年（1623）に死去している。

なお、飯盛城の想定地に城らしい造成の痕跡を探すのは困難である。それは、近年の開発に加え、慶長20年（1615）の一国一城令で徹底的に破却したためではなかろうか。なにしろ、平戸松浦氏は関ヶ原の合戦で西軍方にあったため

3 北松浦地方の城郭 発行日：2011年3月31日　著者：久村貞男

図18　飯盛城と飯盛大権現、定の墓　※鬼門＝北東

(3) 飯盛城の鬼門　飯盛大権現・金照寺

宗家松浦氏の第一六代親より第一九代正までが居城としたが、その後宗家は今福に移転している。移転の背景は慶長二十年（一六一五）の一国一城令を契機としていると思われ、第二〇代の正は元和九年（一六二三）に今福で死去している。

令による城破壊は徹底的に行われた模様で、飯盛神社が鎮座する飯盛山の麓丘陵が推定地なのだが、城らしい遺構は見いだせない。ところが、親が永禄八年（一五六五）に小野にあった小社を鬼門に移転鎮座したのが飯盛大権現であり、その位置から南西を逆に見ると飯盛神社が位置することになる。

城の位置が不明ななか、鬼門から逆算して城の位置が推定された例である。また、第一八代定は文禄慶長の役で戦死するが、その墓が夫人とともに裏鬼門に相当する方向の金照寺にある。墓造営後の慶長十七年（一六一二）あるいは元和二年（一六一六）に楠木（楠木町）から現在地に移転したという。墓は少なくとも慶長三年（一五九八）の役後に建てられ、寺創建のとき墓は建立の位置に存在したようだが、明治三十三年（一九〇〇）の本堂改築にあたり、本堂脇に移転したという。

飯盛大権現は、飯盛神社よりN―一〇度―E、金照寺はW―三八度―Sの方向にある。なお、飯盛大権現は明治四年に廃され、飯盛神社となった。そのため神像の一部は飯盛神社の神体になっている。その神像は、烏帽子を被った堂々たる武士立像であり、宗金親と推定されている。

4 宗家松浦戦国記

発行日:2011年2月25日　著者:澤 正明

飯盛城築城

「天文四年十一月二日、宗金は相神浦飯盛城を創る。後に移ってここに居る」(「新豊寺年代記」・『大曲記』)

「五年、宗金の妻波多氏、名は多見野、父興の為に遥拝墓を相神浦中里新豊寺に建てて冥福をすすめる」(墓銘「西蓮寺位牌趺下銘」)

『家世伝』が「天文四年十一月二日宗金は相神浦飯盛城を創る」の記述の根拠としたのは新豊寺年代記にある「天文四年の飯盛城十一月二日取始也」の記事である。

「歳宮旧記」や『印山記』が宗金の相浦帰還した永正九年(一五一二)ころに飯盛城を造り徙ったとしてことについて、『家世伝』は大間違いであるとしている。それは、宗家松浦氏が、旧領を回復する以前のことであり、飯盛城を造るのは難しいとしたものである。飯盛城について『印山記』は、

「抑、此飯盛城と申は、高き事雲に聳、後は古木蔭を累、東は岩石、麓は大河、西は蒼海満々として、其外堀を掘り、水を湛へ、香椎川・西方寺口迄要害稠く固ければ容易に責べき手段もなし」

と記している。なかなかの堅城で、最後まで武力では落ちなかった城である。この飯盛城の所在地については諸説があるので、紹介しておく。

(1)明治四十三年に発行された北島似水著『佐世保発達史』は、佐世保の郷土史の原典として有名であるが、飯盛城の所在地について発達史は次のように記す。「政の一子幸松丸ここに十有五歳の元服儀式を踏んで相神浦に帰り飯盛城を築く、今の飯盛神社の西方中腹の箇所抑彼が城郭たり。木の宮の下堀に聊か現存せり。本丸は愛宕嶽東一段下りし倉屋敷と伝えらる」としている。飯盛神社が現在の場所に遷宮があったのは明治三十九年のことであり、「今の飯盛神社の西方中腹の箇所」とされる位置は「洪徳寺の西上の天満宮周辺」と考えられる。長崎県立図書館に明治時代初期の相浦の地図が保管されている。日付がなく、作成の正確な時期はわからないが、記載された内容から明治十七年に作成された『北松浦郡村誌』の付属地図と思われる。この地図に「飯盛城址」の記載があり、『佐世保発達史』の記述と一致する。土地の所有者はここを「しろやま」と呼んでおられる。石塁ものこっており、山城の雰囲気を残している。また、「うわぼり」と呼ばれる場所が洪徳寺と天満宮の間にある。多分この間に堀切りがあったに違いない。〝倉屋敷〟は小字〝蔵の谷〟の中にある。

(2)近年飯盛城の跡であると発表されているのは愛宕山の北東に位置する小字〝愛宕山〟の場所である。佐世保市教育委員会が昭和五十六年に調査・報告した『中世山城分布調査報告書』によれば、「石塁、階段状石積、石垣、井戸があり、東西一五〇メートル、南北一〇〇メートル、の規模である」としている。この場所は標高八〇メートルの位置にあるが、驚くことに、土地の一筆は明治の初期土地台帳がつくられるとき「田」の地目となっている。この高い場所に水田の耕作ができる程水が豊富であったことがわかる。ため池があり、近年まで稲が作られていたと聞く。

(3)平成九年に『武辺城跡発掘調査報告書』が佐世保市教育委員会より発表され、「木宮神社周辺に飯盛城の中心があったことが推定される」と堀切・土塁・野面積みの石垣など詳しく調査をされた吉福清和氏が発表されている。木宮神社周辺を根城とし「愛宕山の北東に位置する小字愛宕山の場所」を東出曲輪とし、洪徳寺の上の「天満宮周辺」を西出曲輪とする『武辺城跡発掘調査報告書』の見解は納得できる。

土地の古老は「昭和十六年、木宮神社上に第二浄水場の施設が海軍の手によって建設されるとき石垣などなにもかも壊してしまった。現在は浄水場を取り囲むの金網の中になっているが、何かは残っているはず」と語る。

この周辺は、見晴らしもよく相浦の一等の場所で、立派な石垣の屋敷跡もある。ここを中心とした飯盛城は、「香椎川・西方寺口迄要害稠く固ければ容易に責べき手段もなし」と『印山記』が記すとおり、難攻不落の山城であることが地形からも想像できる。吉福清和氏も飯盛城の調査について「踏査と地表観察による成果であって、測量や発掘による科学的調査ではない」と断っておられる。当地の中世史を彩る飯盛城の本格的調査がまたれてならない。

5 佐世保史跡探訪 発行日:2010年7月17日　著者:佐世保史談会

飯盛山(愛宕山)に飯盛城が築かれたのは、戦国時代の天文4年(1535)のこととされている。築城したのは宗家松浦16代の丹後守親(ちかし)である。

「印山記」は「そもそもこの飯盛城と申は高きこと雲に聳え、後は古木蔭をかさね、東は岩石、麓は大河、西は蒼海満々として其外堀をほり、水をたたえ、香椎川・西方寺口まで要害きびしく固めければ容易く責むべき手段もなし」とその堅城ぶりを記している。

飯盛城跡の遠景

宗家松浦はこの城をより所にして、平戸松浦と天文・永禄と二度にわたって激しく争うことになるが、武力ではこの城は陥落しなかったといわれている。戦火のために疲弊した領民を哀れに思った丹後守親が、松浦隆信の三男九郎を養子に迎え、平戸松浦との講和を図ったと『印山記』は記している。

飯盛城跡は北松浦郡村誌の記録や絵図、地名から推察すれば、愛宕山南側中腹の木宮神社から飯盛神社の旧跡にかけた付近一帯であり、その東・西に出丸があったと考えられる。

6 佐世保から歴史を歩く 発行日:2010年1月31日　著者:池田和博

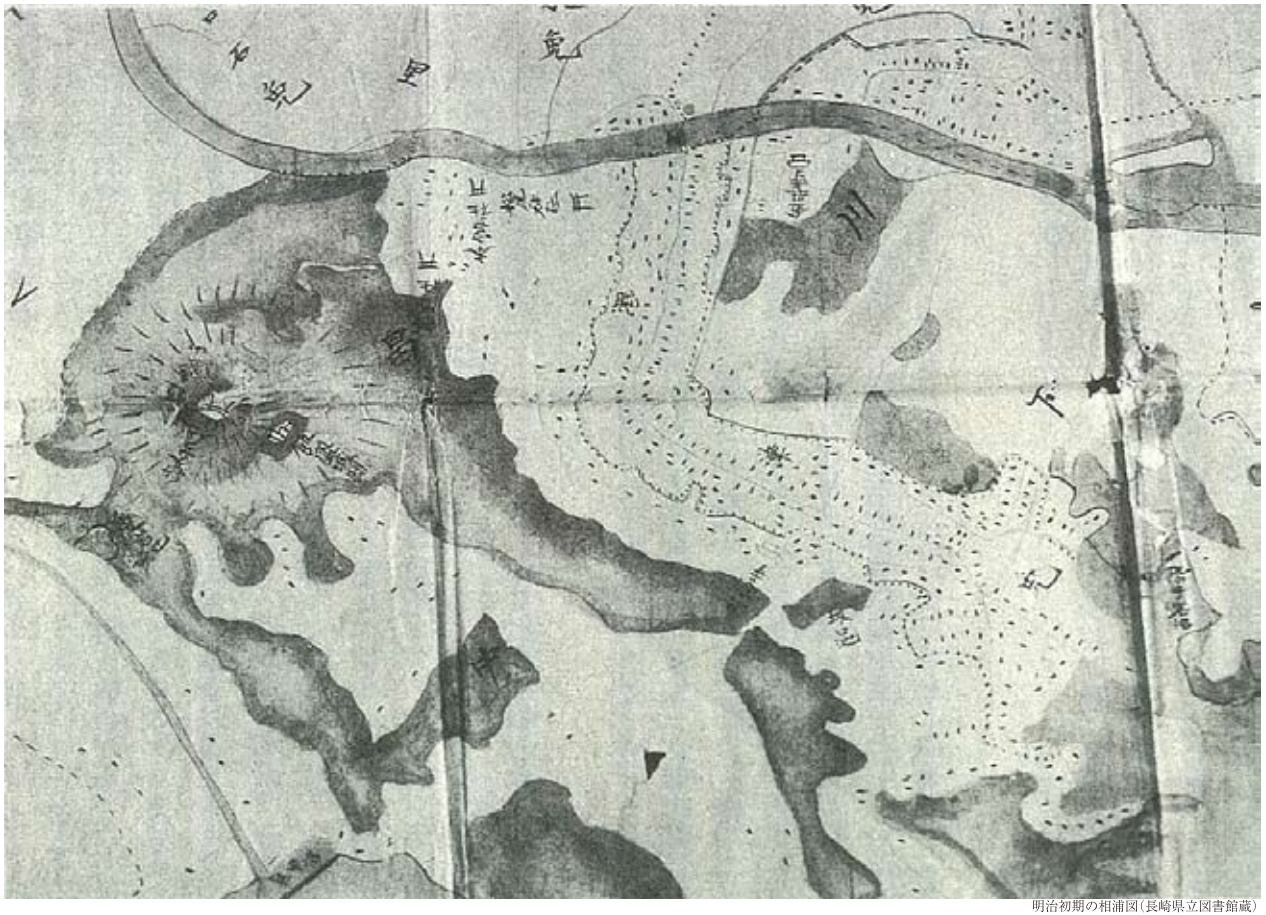
洪徳寺の脇、赤レンガ塀の残る坂道を登っていく。すぐ目の前には三角形の飯盛山がそびえる。まず目印の涸れ池から左手に折れ、杉木立の中に入った。しばらく進むと切り通しになっている所に出た。右手の道沿いに続く石積みは戦国時代の石塁、上手の石垣は段築のようにも見える左手にある小さな苔むした石段を登ると広場に出た。中央に天満宮の祠があった。ここが新しく発見された飯盛城の跡とされている所だ。さらに進むと断崖の上から相浦ニュータウンが一望のもとに見下ろせる。昔は棚方ももっと海がせまっていたに違いない。賤ノ浦(しずのうら)は真下である。

「『西は蒼海満々として』という『印山記』の記録には符号するね」

「今まで確認されていた飯盛山東側中腹の城跡は、石積、石塁で出来た近世城郭に近い城という感じがするけど、この城は海からの敵を防ぐ西の砦かな？」

「木宮神社付近が飯盛城本丸跡との説もあり飯盛城関連遺構は計4箇所ある。今後さらに調査が必要だ。帰りは城跡周辺を見学したが、矢竹らしきものがあちこちに残っていた。

7 相浦郷土史 佐世保市合併五十周年記念 発行日:1993年(平成5年)8月1日　著者:合併記念事業実行委員会


明治初期の相浦図(長崎県立図書館蔵)

長崎の県立図書館に納められている多くの地図の中に明治時代初期の相浦の地図がある。惜しいことに作成の日付がなく、確実な作成の時期は判らないが、記載内容からして、明治十年頃のものと思われる。あるいは明治十七年に長崎県に提出された『北松浦郡村誌』の付属地図かも知れない。この地図は明治初期の相浦の様子を読み取ることが出来て興味深い。

先ず、現在の地図で『愛宕山』としている山の呼名を『飯盛山』としている。明治十七年の北松浦郡村誌は飯盛山と記し、大正七年の山口村郷土誌は愛宕山と記しているので、この間で呼名が変わっているが、詳しい事情は判らない。

伊万里市山代町久原に源四郎大夫直の築城とされ、その後鎌倉時代以降山代氏の城であった飯盛城の跡があるが、その城山の形は驚くほど中里方面より見た愛宕山に似ている。丹後守親が城を築いた時に、直の飯盛城に倣んで、『飯盛山』と呼んだのではなかろうか。相神浦物図は山を飯盛としている。『愛宕諸軍地図』が『飯盛山』に記られたのは慶長年間とされており、山の呼名がその『愛宕』に由来するとすれば愛宕山と呼ばれるようになるのはその後であろう。山代氏の守護神である青幡神社の本地仏が勝軍地蔵であり、丹後守親が城を築いた時に勝軍地蔵を城内に祀っていたことも考えられる。秦藤樹に、『筑津浦の愛宕山を城築飯盛と号して……』とありそのことを示唆しているのかもしれない。

門前の飛石を渡って、旧飯盛神社の下に至り、右折して飯盛城跡の側を通って頂上に登る道はついている。今の飯盛神社の位置は松浦神社となっており、印山記にいう香椎川と思われる川もある。

この古地図で、飯盛城跡とされているのは、洪徳寺の左上にあり、『中世山城分布調査報告書』等に示されている位置とは大きくかけはなれている。印山記に「そもそも、この飯盛の城と申すは高きこと雲に聳え、云々」とあるように、要害の地で、三ケ年の城攻めにも耐えて、平戸方はとうとう武力では陥落させることは出来なかった城である。現在、愛宕山の周囲を歩いてみれば、方々に出城であったと考えられる石垣が残されており、愛宕山全山が要塞であったと見ることができ、飯盛城の見張台として頂上が利用されていたことがこの地図でも想像出来る。中松丸が城を築いたのは確かに『中世山城分布調査報告書』に指摘されている場所であろう。

8 佐世保名所史跡図絵

発行日：？年　著者：？ 図：山鹿氏

飯盛城は相浦富士と呼ばれる愛宕山の東中腹の相浦川を眼下にのぞむ位置に築かれています。

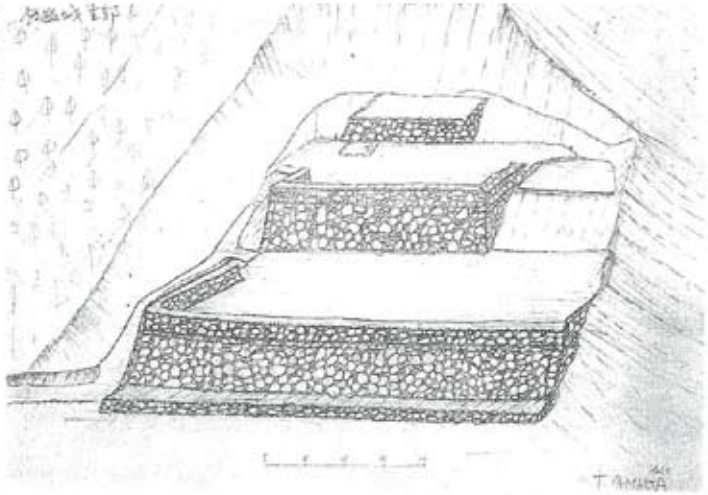
城の形は、女城に分類され、その構えは「館城」といいます。城跡は上下二段に設置され、石垣などがかなり広い範囲にわたって残されています。

【位置】

愛宕山の中腹。愛宕市営住宅の正面の山中。相浦川の飛び石を渡り、数十メートル上がると門前につく。

門前から山道を徒歩で20分程のぼる。

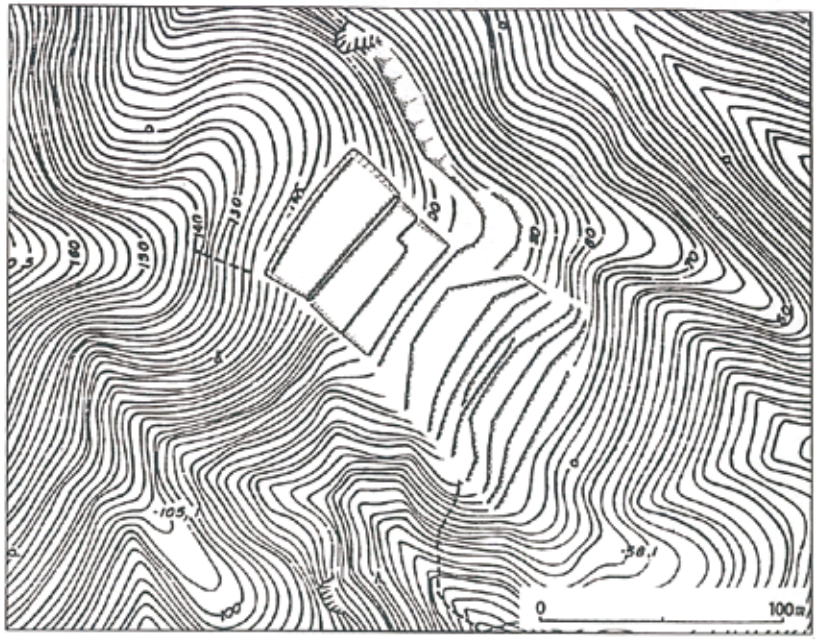
飯盛城遠景図



遠景

9 中世山城分布調査報告書

発行日：1981年（昭和56年）　著者：佐世保市教育委員会



第14図　飯盛城

2 飯盛城（第12図No 2）標高259m、比高104m

所在地　佐世保市相浦町

創建者　松浦丹後守　親（幸松丸）

形　式　山城（女城）

遺　構　石墨　階段状石積、石垣、井戸

規　模　東西150m×100m 南北

文　献　松浦家世伝、印山記、三光譜録

概　略

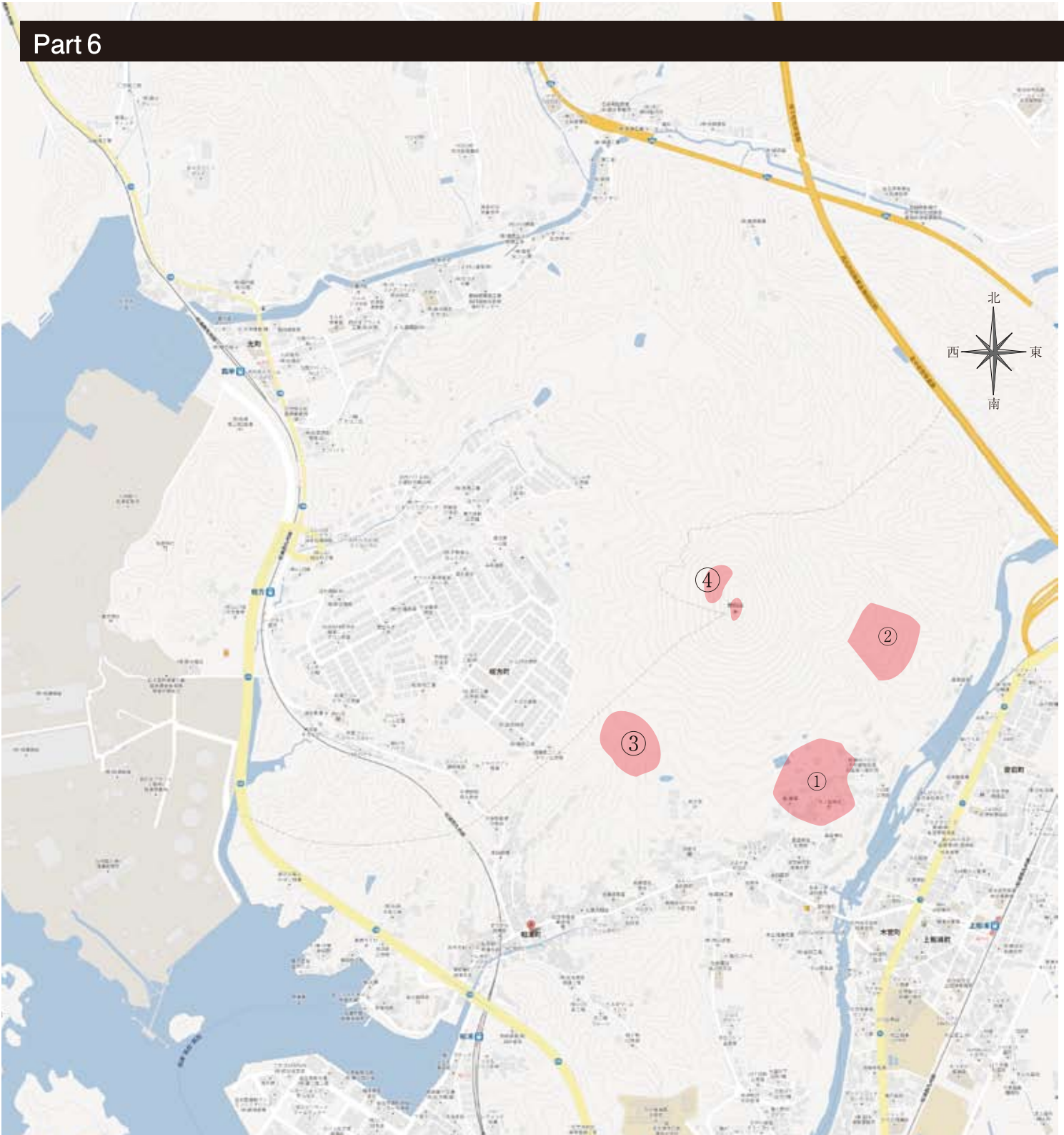
飯盛山は「丹後守政」の子、幸松丸が成人し、永正九年（1512）に築城したという城で、佐世保市内の城跡の中で、築城年代が確実に記録されている数少ない城である。

飯盛城

みどころ　飯盛城は、永正九年、中世後半の築城で、市内の山城とは築城方法が新らしく、他の中世山城では見られない石垣に依る築城で、高さ7mの石垣を二段積んである。

東中腹の石墨

©tetsuro-kakita



＜まとめ＞現時点での城と思われるポイント

① 木ノ宮神社、飯盛神社、浄水場一帯

② 東側中腹

③ 西側洪徳寺の上の天満宮周辺

④ 北西側、山頂下周辺

現時点では①番の木ノ宮神社、飯盛神社、浄水場一帯を主郭として、②を東出曲輪、③を西出曲輪とする。そして山頂に見張り台があったとされている。
しかしこの3つの郭はそもそも異なった年代に築かれたとの意見もある。
さらに、最近発見された頂上より北西側に少し下った所で見つかった石塁、さらには2つの平場と10m程の竪堀がその付近で確認されている。
この場所は、永禄の戦い時に相手の平戸方が本陣をおいたとされる鳥屋城の見張り台を正面に見据えることができる場所であり、平場の広さから、もしかしてここに主郭を置いていた可能性もある。
まだ本格的な発掘調査には至っていないが、標高の高さから畑跡とは考えにくく、おそらくは中世の遺構と思われるとのこと。
さらに北西側の中腹一帯はいまだ未開の地でまだまだ中世飯盛城の遺構が出てくる可能性は高い。

＜飯盛城と鉄砲伝来異聞＞

飯盛城は日本で始めて、戦で鉄砲が使われた場所である。という説があります。日本に初めて鉄砲が伝来したのは1543年（天文12年）。種子島に漂着したポルトガル人が伝えたと一般的にはいわれています。
ところが、新しい研究によると鉄砲を伝えたのはポルトガル人ではなく、彼らを連れてきた中国の海賊、王直（おうちょく）だったらしく。その王直は、一説よると1541年（天文10年）にすでに平戸に来ていたといわれており、そして、平戸松浦氏の歴史書には、飯盛城攻めで、鉄砲を使ったという記録があります。ひょっとすると1542年の時点で、すでに平戸松浦氏は鉄砲を所有しており、第１回飯盛城攻めに使用したのではないでしょうか？そうすれば、日本で初めて鉄砲が使われた戦は、第1回飯盛城攻めで、鉄砲が始めて伝えられた場所は、平戸ということになる。というわけです。